新潟県立近代美術館だより
Spring & Summer 2015

雪椿通信

vol.44

2015年度　前半期の企画展

館長　徳永　健一

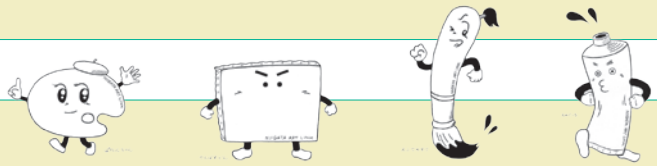
エドゥワール・マネ《灰色の羽根帽子の婦人》1882年
ひろしま美術館蔵

4月18日から6月7日まで、「印象派への旅～ひろしま美術館フランス絵画展」を開催いたします。ひろしま美術館は昭和53年に、広島銀行が、創業100周年記念事業として設立した美術館です。広島は昭和20年8月6日に、原爆により幾多の尊い命が失われ町は一面の焼野原となりました。戦後30余年を経て広島は平和都市として復興を遂げました。そこで求められたのは、心のやすらぎの場でした。この展覧会は“愛とやすらぎのために”をテーマに同館が収集したヨーロッパ絵画の名品の中から、当館学芸員が選んだフランス印象派に焦点をあてた優れた作品など70点を展観するものです。ポスターとなるエドゥワール・マネの《灰色の羽根帽子の婦人》やカミーユ・ピサロの《ポン＝ヌフ》など、広く知られたフランス絵画ばかりです。近代美術館が開設して23年目となりますが、印象派にスポットをあてた展覧会は平成11年のオランジュリー美術館展以来です。長岡は昭和20年8月1日夜半、B29の空襲で大きな被害を受け、毎年、慰霊がつづけられています。広島から「愛とやすらぎ」のメッセージが届けられます。

また、7月4日から8月30日まで、「生誕100年　写真家・濱谷浩」を開催します。この展覧会は日本の昭和を代表する写真家濱谷浩が撮った、“日本の風土と人”をテーマとした写真展です。昭和14年から昭和27年までの13年間、彼は高田に来て、出会った多くの人たちとの交遊から、取材の基礎となる民俗、習俗、暮らしの知識を深めました。昭和20年8月15日、寄宿先の高田寺町で玉音放送を聞いて撮った《終戦の日の太陽、高田、新潟》は今回の注目の一点です。高田は戦中・戦後期、疎開などで多くの文化人が集い、そこに濱谷は深く溶け込み、その中で得た情報、知識が、取材地になりテーマとなりました。自然に寄り添い生き暮らす人、人の本質を撮り続け、作品が形成されていきました。戦前の「モダン東京」をプロローグに、「雪国」、「裏日本」、「戦後昭和」、「學藝諸家」と構成します。作品は全てモノクロです。濱谷浩の作品はその後、日本、世界へと対象は広がっていきますが、彼の原点は新潟と雪だと思います。1月、彼が10年間取材に通った高田西部の桑取谷を訪ねました。雪のない海岸線からわずか10km、桑取谷は静寂のなか丈余の雪に埋もれていました。濱谷が訪ねた頃は25戸あった集落は、戸数も住む人も減らしましたが、小正月行事は続いています。

濱谷浩《終戦の日の太陽、高田、新潟》1945年

NIIGATAアートリンク2015



あなたもスタンプラリーにチャレンジしてみませんか？

「NIIGATAアートリンク」では、今年度もスタンプラリーを実施します。新潟県立近代美術館、万代島美術館、新潟市美術館、新津美術館の対象展覧会を見て各館のスタンプを集めると、すてきな景品をプレゼント！詳しくは各館のチラシをご覧ください。

濱谷浩《測候所開設以来の記録的な豪雪、高田、新潟、1945年2月26日》1945年

濱谷浩《會津八一》1947年

濱谷浩と高田

昭和14年１月に、濱谷浩はグラフ雑誌の仕事で初めて雪国を訪れました。それは、高田連隊スキー部隊の冬期演習の取材でした。雪の山野を２日間で36キロ移動・撮影した後、なぜかそのまま帰る気になれず豪雪の高田の街をさまよいます。東京で生まれ育ち、銀座や浅草など華やぐ都市の情景や風俗を撮っていた濱谷は、そのあまりの環境の違いに好奇と驚きの眼を見張ったのでした。入った一軒の喫茶店で話しかけてきた店主に、この雪深い街の人間の暮らしを撮影してみたいと話したことで紹介された人物との出会いが、その後の写真家としての方向性を決定することになったと言ってよいでしょう。その人物とは、民俗学を研究するためその日の夜行列車で東京に向かう市川信次でした。この出会いによって、濱谷は始原的な日本の風土と日本人の現実に迫る写真家としての道を歩み出すのです。

昭和20年７月には、激烈さを増す空襲により、東京から満員の列車に乗って自らが撮影してきたフィルムや写真機材などを高田に運び入れ、やがて終戦を迎えた濱谷は、東京へは戻らずにじっくりと腰を据えて自分を見つめ直す意志を固め高田に留まります。翌年１月には、初の個展となる昭和20年高田の豪雪の記録写真展を開催し手応えを覚えた濱谷は、次に堀口大學や會津八一をはじめとする越後在住の芸術家を撮影した２度目の個展を開催します。さらに、終生の伴侶も得て、徐々に活気を取り戻しつつある写真界と増加する仕事への依頼からついに高田を離れることを決めます。このように、20代から30代という写真家ひいては人間としての重要な形成期を、高田という街と深く強く結びつきながら生きることで、濱谷浩は激動の時代の波にも流されず偉大な写真家へと成長していったのでした。

（学芸課長代理　澤田佳三）

私とこの1点　羽下修三《二千六百年を舞う》

羽下修三《二千六百年を舞う》1942年
当館蔵

近代美術館勤務の12年間で最大の出来事といえば、2004年10月23日の中越地震（中越大震災）でしょう。私は学芸員になってまだ２年目でした。土曜の勤務を終えて帰宅途中、大きな揺れを感じ、その後美術館に戻り、他の学芸員とともに展示室や収蔵庫の点検に入りました。ロビーに展示していたガラス作品（花器）は修復不能なほどに大破し、その他も転倒や落下によって傷ついた作品が幾つもありました。

展示室１では自らが担当した常設展「昭和戦前期の日本画」を開催しており、部屋の奥に展示していた羽下修三の木彫《二千六百年を舞う》のことが気になりました。1940年（昭和15）の「紀元二千六百年」を記念する雅楽に題材を得たもので、学生時代の研究テーマとのつながりで興味を持っていた作品でもありました。私は、この作品が転倒し、無残な姿になっていることを想像しました。

しかし展示室に入ると、《二千六百年を舞う》はそのままの姿で立っていました。一木造で内刳りもなく、重心が低かったことが功を奏したのでしょう。

その後余震が続き、この木彫は別の絵画作品に差し替えられました。当時の記録写真を探しましたが、《二千六百年を舞う》は無傷という理由で、撮影されていなかったようです。しかし私の心には、展示室に泰然と立つその姿が、今でもはっきりと焼き付いています。

（万代島美術館主任学芸員　長嶋圭哉）

印象派への旅

今回の展覧会は、「２つの時間の流れ＝旅」を意識してタイトルを選んでいます。一つは印象派が誕生するまでの時間を下っていく旅。もう一つは印象派を意識して時間を遡行していく旅です。私たち日本人にとってフランス絵画とは、今日でもその中心に「印象派」が大きく存在しているように思われます。それを暗示するシンプルな言葉を選択しました。

展覧会は三部構成となっています。第一章ではドラクロワ、ミレーといった印象派に先立つ世代の画家たちが、身近な自然を観察し、新しい色彩表現を発見した様相をご覧いただきます。第二章では、マネ、モネ、ルノワールらが印象主義を見出して、独自の画風を展開した様子や、その後の画家たちによる新しいパリ風景を楽しむことができます。そして第三章では、印象派を乗り越えて登場してきた20世紀の前衛画家たちをとりあげています。フォーヴィスムを担ったドランやヴラマンク。またフジタ、モディリアーニなど第一次世界大戦前後のパリに集まったエコール・ド・パリの国際色豊かな画家たちも活躍します。展覧会を通して、約100年間のフランス絵画の変遷を堪能できる内容となっています。

（学芸課長代理　平石昌子）

カミーユ・ピサロ《ポン＝ヌフ》1902年

ポール・シニャック《ポルトリュー、グーヴェルロー》1888年

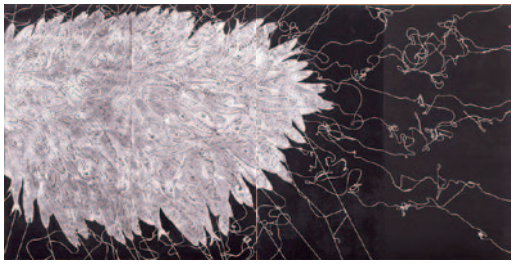
キスリング《ショールをつけた少女》

3点ともひろしま美術館蔵

夏休みは美術館で…

親と子のワクワク美術館①

不思議の国へようこそ



八木幾朗《魚図》（部分）　2003年　当館蔵

今年の夏休みは、美術館に遊びに来てみませんか？……と、ご家庭に呼び掛けたいと思います。

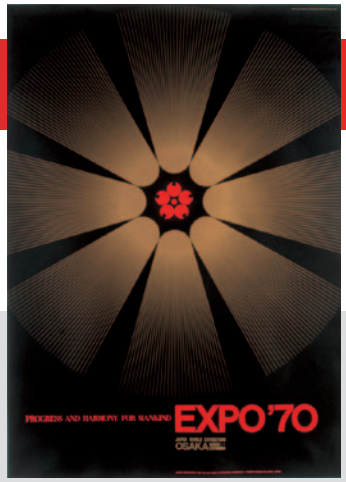
本年度から、新潟県立近代美術館では、コレクション展の中で、ファミリー向けの展覧会を開くことにしました。それは、子どもはもちろん、大人にも、美術って「すごい！」「不思議！」「おもしろい！」と感じてほしい、知ってほしいからです。当館の所蔵品の中から、皆さんが楽しく親しめるように、作品を選び、展示します。

第１回目は、「不思議の国へようこそ」。作品を通して、日常とは違う、異次元の世界を旅してみましょう。すっぽりと、中に入りこんでしまえそうな、大きな作品がメインです。まずは、その大きさに圧倒され、そして、絵の中へ――不思議の旅がはじまります。

意味なんて、わからなくてもいいのです。知識なんて、なくてもいいのです。「見方」なんて、知らなくてもいいのです。大事なのは、心が動くこと。そして、眼が開かれること。楽しく感じること。

この夏、美術館でワクワク体験をどうぞ！

（学芸課長代理　宮下東子）



亀倉雄策《EXPO'70》ポスター　1967年　当館蔵

近代美術館・万代島美術館、両館で開催

亀倉雄策生誕100年展

新潟県燕市出身のグラフィックデザイナー・亀倉雄策［1915-1997］。今年は亀倉が生まれてからちょうど100年。これを記念して、万代島美術館では初期から晩年に至る代表的なポスター作品等を紹介する回顧展を、近代美術館では亀倉が責任編集を手がけたデザイン誌『クリエイション』に焦点を当てた展覧会を開催します。それぞれの角度から、戦後の日本のデザインを確立した亀倉の業績を振り返ります。

万代島美術館「生誕100年　亀倉雄策展」
会期：7月11日（土）～8月30日（日）

近代美術館「生誕100年　亀倉雄策と『クリエイション』」
会期：11月14日（土）～2016年1月17日（日）

万代島美術館は7月11日から！

CATALOGUE GUIDE

「新潟県立万代島美術館　開館記念展Ⅰ　絵画の現在」

新潟県立万代島美術館　開館記念展Ⅰ
絵画の現在

会期：2003年7月12日(土)～8月17日(日)

美術館は多くの企画展を開催しますが、どんな館でも１回しかできない企画展があります。それは美術館の開館をお披露目する開館記念展です。「絵画の現在」は新潟県立万代島美術館の開館記念展として企画されたもので、2003年当時活躍していた美術作家11人を集めた展覧会でした。出品作家の半数の方が本展のために新作を用意していただくなど、展覧会としてはたいへん充実したものでした。

しかし、図録の制作は困難を極めました。掲載すべき作品には新作も多く、展覧会の間際まで、この世に存在していない状況です。さらに図録の仕様も、作品のダイナミックさを伝えようと、図版90頁の中に片開き14頁、両開き１頁を入れ込んだ、難易度の高い複雑なものでした。どんな美術館も開館前の忙しさは並大抵ではありませんが、当時、担当であった私自身、後にも先にもこれほどたいへんだった図録はありません。この図録を発行した印刷会社は印刷機の全てをこの図録に集中させ、開場式のわずか16日前に完成した新作も含め全作品を掲載し、無事、開場式前日に納品してくれました。

現在、あらためて眺めてみても、全体の構成も発色も良く、本展の出品作家で、今は故人となられた辰野登恵子様から、素晴らしい図録だと言っていただいたことを思い出します。お値段以上の意味と価値がある図録です。ぜひ一度お手にとってみてください。　（学芸課長　藤田裕彦）

ミュージアムショップ KINBI

人気の《アリス・グレイの肖像》グッズ

トートバック（1,620円（税込））や携帯ルーペ（1,028円（税込））等、さまざまなグッズを取り揃えております。

ミュージアムショップ KINBI
TEL. 0258-28-2200（直通）

レストラン「広告塔」

白身魚のミルフィーユ・クレープ包み（￥1,250（税込））

白身魚（ナイルパーチ,旨味はスズキに似ています）と小海老を重ね合わせ、クレープで包み蒸しあげました。玉葱の甘味を加えたトマトソースでお召し上がりください。

レストラン「広告塔」TEL.0258-29-5001（直通）

近美のおすすめ

エントランスを入り右へ、講堂へと続く自動ドアのすぐ脇にある黒い本棚・・・。重厚感のある装丁の、美術に関する本が沢山揃っています。普段はなかなか目にする機会のない珍しい本を、館内で自由にご覧いただけます。ロビーの大きなソファで寛ぎながら、ゆっくりとページを捲ってみてはいかがでしょうか？

また、美術書の隣の本棚には、当館で開催した歴代の展覧会の図録を多数ご用意しております。皆様のお好きな作家の図録、思い出のある展覧会の図録もあるかもしれません。ぜひ、あわせてご覧になってみてください。過去の展覧会の図録は、現在も販売しているものもございますので、お気に入りを見つけた際は、お気軽にショップのスタッフへお尋ねください。（嘱託員　佐藤友紀）

お世話になってますシリーズ

その６

「昔ながらの鉛筆」

皆様はこの深緑色にどこか懐かしさを感じるのではないでしょうか？

展示室内では、作品の損傷防止のため、鉛筆のみのご使用をお願いしております。受付で貸出しも行っておりますので、お気軽にお声がけください。

（元嘱託員　佐藤望）

編集部からのひとこと

1月末に当館のホームページをリニューアルし、「雪椿通信」のバックナンバーがPDFで閲覧できるようになりました！当館の代表作《アリス・グレイの肖像》が表紙を飾った創刊号は、前川誠郎名誉館長による大光コレクションの紹介記事から始まり、「雪椿通信」という愛称の由来なども記されています。雪椿通信のバックナンバーへは、トップページ⇒コレクション・刊行物等⇒美術館だより（雪椿通信）へ。ぜひアクセスしてみてください。

URLはこちら　美術館だより（雪椿通信）
http://kinbi.pref.niigata.lg.jp/collection-kanko/dayori.php

（主任学芸員　伊澤朋美）

新潟県立近代美術館だより　雪椿通信　第44号

編集・発行　THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館
〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14
TEL 0258-28-4111(代)　FAX 0258-28-4115
http://kinbi.pref.niigata.lg.jp/　e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷　株式会社 山田写真製版所
〒950-0064 新潟県新潟市東区松島1-5-14

発 行 日　2015年4月14日